

■堀部武庸(安兵衛) ほりべたけつね ・ ・ ・ ・ ・ 1670＝ 三井越後屋・1673＝	3歳 越後国新発田城下外ヶ輪で、新発田藩溝口家家臣の中山弥次右衛門の長男に生まれる。母は同藩士溝口盛政の六女。母は、武庸を出産した直後に死去したため、母方の祖母のところへ送られて育てられるが、祖母が死去すると再び父のところへ戻り、以降は男手ひとつで育てられる。 姉が3人おり、長女は夭折、次女は中蒲群牛崎村の豪農の長井弥五左衛門に嫁ぎ、三女は溝口家家臣町田新五左衛門に嫁いでいる。
越後騒動・ ・ 1679＝ 徳川綱吉將軍1680＝	9歳 10歳
八百屋お七・1683＝ 堀田正俊暗殺1684＝	13歳 14歳 浪人後、ほどなくして父が死去。孤児となり、はじめ母方の祖父盛政に引き取られたが、盛政もその後2年ほどで死去したため、姉の嫁ぎ先である長井家に引き取られた。
日本永代蔵・1688＝ 湯島聖堂・ ・ 1690＝	18歳 20歳 長井家の親戚佐藤新五右衛門を頼って江戸へ出て、小石川牛天神下にある*堀内正春の道場に入門。天性の剣術の才で頭角をあらわし、すぐさま免許皆伝となって、堀内道場の四天王と呼ばれるようになり、大名屋敷の出張稽古の依頼も多くくるようになって、収入も安定、牛込天龍寺竹町に一戸建ての自宅を持つ。
芭蕉+師宣没 1694＝	24歳 *甥叔父の義理を結んでいた同門の菅野六郎左衛門(伊予国西条藩松平家家臣)が、高田馬場で果し合いをすることになり、助太刀を買って出て、相手方3人を斬り倒す(高田馬場の決闘)。この決闘での活躍が”18人斬り”として江戸で評判になり、これを知った赤穂浅野家家臣堀部金丸から強く望まれ、藩主浅野長矩から中山姓のままで養子縁組してもよいという異例の許可もあって、金丸の娘ほりと結婚し、金丸の婿養子となり、浅野家家臣に列して、200石の禄を受け、御使番、馬廻役となった。
生類憐令頂点1695＝ ・ ・ ・ ・ ・ 1697＝	25歳 27歳 金丸が隠居し、家督相続。中山姓のままでも良いはずであったが、堀部姓に変えている。なお、家中では新参であり、異例の養子入りであるから、金丸の堀部家とは事実上別家扱いだったと考えられる。
吉保大老格・1698＝	28歳 尾張藩主徳川光友の正室千代姫(江戸幕府3代將軍徳川家光長女)が死去して、諸藩大名が弔問の使者を尾張藩へ送った際、藩主長矩からの弔問の使者に選ばれ、尾張名古屋城へ赴く。
松の廊下事件1701＝	31歳 *主君長矩が江戸城松之大廊下で高家吉良義央に刃傷に及び、長矩は即日切腹、赤穂浅野家は改易と決まると、江戸詰の藩士奥田重盛、高田郡兵衛とともに赤穂へ赴き、国許の筆頭家老大石良雄と面会。箆城さもなくば義央への仇討を主張するが、長矩からは浅野長広による浅野家再興を優先することを諭されて、赤穂城明け渡しを見届けた後、江戸に戻る。その後も強硬に義央への敵討を主張して、江戸急進派のリーダー格となり、京都山科に隠棲した良雄に対して江戸下向するよう書状を送り続ける。良雄は、武庸ら江戸急進派を鎮撫すべく、次々と使者を江戸に派遣するが、全員武庸に論破されて急進派に加わったため、良雄自らが江戸へ下り、会談の結果、一周忌となるの決行を約束して京都へと戻るも、一周忌が過ぎて動かず、
赤穂浪士討入1702＝	32歳 再び良雄と面会するために、京都へ上った。事と次第によっては良雄を切り捨てるつもりだったともいわれている。長広の浅野宗家への永預けが決まり浅野家再興が絶望的となると、良雄も覚悟を決めた。京都円山に武庸も招いて会議を開き、明確に仇討ちを決定した。武庸は江戸に戻り、隅田川の舟上に同志たちを集めて会議し、京での決定を伝え、
赤穂浪士切腹1703＝	33歳 *赤穂浪士四十七士は本所松阪の義央の屋敷へ討ち入り、義央を討ち取って本懐を遂げるが、赤穂浪士らは4つの大名家の屋敷にお預けとなり、武庸は良雄の嫡男大石良金らとともに、伊予松山藩主松平定直の江戸屋敷へ預けられ、幕府の赤穂浪士への切腹命で、屋敷にて松平家家臣荒川十大夫の介錯により切腹した。